

中公文庫

夢の上

夜を統^すべる王と六つの輝^き晶^{しょう} 2

多 崎 礼

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

幕間(三)

9

第三章 紅輝晶

11

幕間(四)

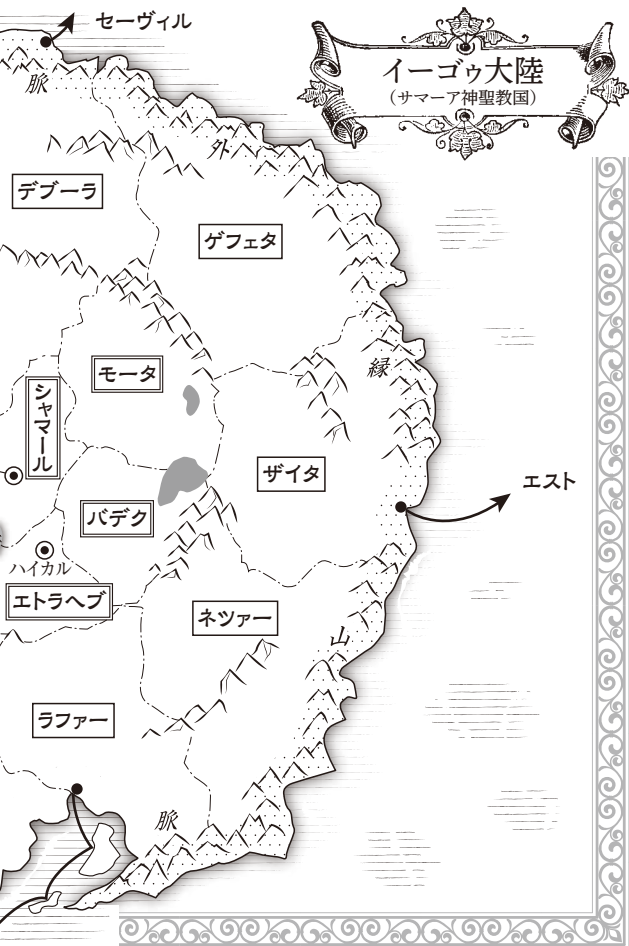
243

第四章 黃輝晶

246

幕間(五)

434



聖教会直轄領

十諸侯領



ジャヌウブ諸島

夢の上
夜を統^すべる王と六つの輝^き晶^{しょう}
2

幕間（三）

夢売りは次の彩輝晶さいきしょうを手にとった。

三つ目の彩輝晶は血のように赤い紅輝晶こうきしょうだった。

夢売りの手の上で、それは一段と輝きを増す。炎のごとく赤い幻光が燃え上がる。

「心の炎——その情念がかくも美しい紅輝晶を生む」

夢売りの声が広間に響く。

「身を焦こがす炎。成し遂げられぬ夢。それは仮初の時空を得て、一時の夢見となり、塵ちりとなりて無に還かえる」

夢売りは紅輝晶を左右の手で包んだ。

それを口元に近づけ、ふうつと息を吹きかける。

まっすぐに差し出された両手。開かれた掌てのひらとともに紅輝晶が花開く。

赤黒い炎が燃え上がる。うねるような炎に炙あぶられて、夢売りの手もまた血塗られたように赤く染まる。

薄く尖とがった花片。赤々と燃える花芯かしん。すべてを切り裂くほど鋭く、すべてを燃やし尽くすほど激しく、怖気おぞけ立つほど美しい、火中に咲く孤高の花。

「これは誰よりも熱く、誰よりも激しい夢に身を焦がした『復讐者の遺言』」

錆と土と、血の臭いがする——
びようびようと荒れ狂う風の音がする。

第三章 紅輝晶

後悔していないと言ったら嘘になる。

私にもっと知恵と勇気があったなら、

これとは別の道を選べたかもしれない。

未来ある若者達の時空を奪わずにすんだかもしれない。

でも私は弱く愚かだった。

許すことも忘れることも出来なかった。

私は――

復讐を望まずにはいられなかったのだ。

闇は怖くない。夜は優しい。

そう教えてくれたのは、サフラだった。

昼は光神サマーアが支配する世界。神の御許みもとにおいて人々は勤勉に働く。だが夜の闇は光神

サマーアの姿を覆い隠す。そこでは人々は初めて安らかな眠りにつくことが出来る。

けれど、あの夜は違った。

魂を切り裂くような悲鳴で私は目を覚ました。寝台に身を起こし、夜の闇に耳を澄ませる。静寂を破って、叫び声が聞こえてくる。

おおぅ……おおぅおおぅ……

言葉にならない声。胸が抉られるような慟哭だった。私は夜衣の上にガウンを羽織ると寝台を離れた。鎧戸を開き、外の様子を覗き見る。

赤茶色の屋根と煤けた白壁、素朴な町並み。いつもと変わらない夜。慈悲深い夜の腕に抱かれて、アルニールは深い眠りにについている。

その時、町の一角がぱあっと明るくなった。

一瞬遅れて爆音が響く。ビリビリと空気が振動し、私の体を震わせる。真っ赤な炎が噴き上がり、黒い煙が天を覆う。

「ハウファ様！」

扉が開く音。低い声が私の名を呼んだ。

振り返ると、戸口にサフラが立っていた。真夜中だというのに平服を身につけ、小剣を携えている。浅黒い肌、長い髪、焦茶色の思慮深い瞳が光木灯の光を宿して青白く光る。

「何が起こったの？」

私の問いには答えず、サフラは私の手を取った。導かれるままに私は階段を下り、玄関広間に出る。そこには数名の使用人達と父ジャサーラ・アルニールの姿があった。

「何が起こったのですか？」

私は父に問いかけた。父が答えようとした時、扉が開いて男が駆け込んできた。時空鉦山で働く鉦夫の一人だ。

「お館様、お逃げ下さい」

汚れた手足。ボロボロに焼け焦げた服。彼の様子を見て、私はようやくことの深刻さを悟った。

「誰だ？」押し殺した声で父が尋ねる。「誰が喰われた？」

魂を喰われた影使いは鬼グルとなる。

あの炎は、鬼グルの発生を意味していたのだ。

このアルニールでは多くの影使い達が暮らしていた。彼らは鉦夫と一緒に時空鉦山に入り、死影達しえいの手から鉦夫達を守ってきた。もし鬼グルと化す者がいれば、彼らは真っ先に駆けつけて、それを倒す。同胞であっても家族であっても同情は許されない。影使い達に課せられた非情な掟おきて。それがこのアルニールを守ってきたのだ。けれど――

「町の者じゃございません。鬼グルになったのは見たこともない男です。どこから運ばれてきて、この町に投げ出されたんです！」

男は悲鳴のように叫んだ。

「これは謀略です。聖教会の策略です。じき神聖騎士団がやってきます。お館様、どうかお逃げ下さい！」

影使いを庇かばうことも、ともに暮らすことも、光神サマーアへの背徳行為だ。それはアルニ―

ルに住む者ならば皆承知していた。もしこの事実が聖教会に知られたら、この町を治める小領主ジャサーラ・アルニールでさえ厳罰は免れないということも。

だから父もアルニールの民達も、聖教会にことが発覚しないよう細心の注意を払っていた。それでも、悲劇は起こってしまった。

開かれたままの扉、外から爆音が聞こえる。闇の中、光木灯を手にした人々が駆けていくのが見える。

「聖教会の奴らめ、思い切ったことをする」

父は不敵に笑った。それは小領主アルニール伯としての顔ではない。あの大將軍エズラ・ケナファの右腕として名を馳^はせた稀代^{きだい}の豪傑、騎士ジャサーラの顔だった。

「我が剣と甲冑^{かっちゅう}を持て！」

響き渡る声で父は命じた。

「女子供を避難所に急がせろ。『使い手』を集めよ。戦える男達は武器を持て。時間を稼^かぐぞ！」

もしこれが聖教会の陰謀なのだとしたら、どんな言い訳も通用しない。彼らの目的はアルニールを滅ぼすことなのだから。だとしたらどこに逃げても無駄だ。父は神聖騎士団を迎え撃つつもりなのだ。

「サフラ——」

召使いの手を借りて甲冑を身につけながら、父はサフラに呼びかけた。

「娘のことを頼んだぞ」

サフラは小剣の柄^{つか}を握り、真顔^{しめこ}で首肯^{しうこん}した。

それを見てから、父は私に視線を向ける。

「ハウファ、怨むならこの父を怨め。決してエズラ様を怨むでないぞ？」

騎士を引退し、領地に戻ると同時に、父は影使い達を土地に受け入れ始めた。それは彼の意志であり、ケナファ侯の意志でもあった。だからこそ不測の事態が発生したならばすべての責任を被ろうと、父は最初から覚悟を決めていたのだろう。

ここで別れたら、もう生きて再会することは叶^{かな}わない。だが私も騎士の娘だ。最期まで気丈に振る舞った母のように、私も泣き叫んだりはするまい。

「お父様、ご武運を」

「ああ、お前も達者でな」

革手袋と手甲^{てつこう}に覆われた腕で私を抱きしめてから、父は身を翻^{ひるがえ}し、館を出て行った。その背を見送っていた私の肩に、サフラがそっと手を置く。

「参りましょう」

私は頷いた。裏口から屋敷を抜け出し、町外れを目指す。そこにある穀物倉庫、地下には隠し部屋がある。万が一の時はそこに逃げ込むよう、アルニールの民達は常々言い含められていた。

町の大通りは人で溢れていた。サフラはしっかりと私の手を握り、人々をかき分けながら進んだ。

家々の屋根を舐^なめるように炎が燃え広がっていく。火花が爆^はぜ、黒煙が渦を巻く。飛び散る

火の粉と炎に炙^{あぶ}られ、頬^ほが熱く火照^{ほて}ってくる。

アルニールの民達は黒煙に咳き込みながら、それでも歩き続ける。助けを求める女の悲鳴。飛び交う怒号。混乱の中、親とはぐれた子供が泣き叫ぶ。

まるで悪夢のようだと思った。

だが本当の悪夢が始まったのは、その直後だった。

目指す穀物倉庫の方向から騎馬隊がやってくるのが見えた。黒煙をマントのようにたなびかせ、十数騎の騎影が駆けてくる。

ケナフア騎士団が助けに来てくれたのかと思った。

が、すぐに違うとわかった。

「エトラヘブ神聖騎士団だ！」

切り裂くような悲鳴が上がる。

町に逃げ戻ろうとする人々。炎に追われて町を出ようとする人々。大勢の人間が押し合い、ぶつかり合い、大通りは恐慌に陥った。

「容赦はいらぬ。すべて斬り捨てよ！」

笑いを含んだ男の号令。

馬上の騎士達が剣を抜き放つ。

神聖騎士達は縦横無^{じゅうおうむじん}尽に馬を走らせる。人々が悲鳴を上げて逃げまどう。斬り倒された体から吹き出す鮮血。馬の嘶^{いなな}き。踏み碎かれた手足。頭を割られた老婆が倒れる。泣き叫ぶ女が喉を裂かれる。親を捜して泣く幼子が、次々と蹄^{ひづめ}にかけられていく。

阿鼻叫喚の直中に、私は呆然と立ちつくした。

働き者で心優しいアルニールの民達。慎ましくささやかな幸せを守ってきた人々。その命が、未来が蹂躪されていく。

こんなことが許されるはずがない。光神サマーアがこんな暴挙をお許しになるはずがない。

「おやめなさい！」と叫ぼうとした。が、一瞬早く、サフラが私の口を押さえ、裏道へと引きずり込む。「ここは危険です。館に戻り、身を潜めて、救援を待ちましょう」

その手を振り払い、私はサフラを振り返った。

「何を言うの。私はジャサーラ・アルニールの娘。領民を置いて逃げるわけにはいかないわ」
「お嬢様をお守りするのが私の役目です」

サフラは小剣の柄に手をかけ、私を見上げた。その顔は怖いほど真剣だった。いざとなれば私を昏倒させてでも、この場から連れ出そうという意志が透けて見えた。腕力ではサフラになわない。不承不承、私は頷くしかなかった。

私達は裏道を抜け、屋敷に戻った。

二階から下卑た嘲笑が聞こえてくる。神聖騎士団だ。どうやら父や私の私室を漁り、装飾品や調度品を物色しているらしい。

私達は足音を忍ばせて廊下を抜け、地下への階段を下った。地下倉庫には乾燥させた葉煙草の葉を詰めた袋と、年代物の葡萄酒の樽が並んでいる。その大樽の隙間に私達は身を隠した。

「お怪我はありませんか？」

小声で囁き、サフラは私の顔を覗き込む。扉の下から忍び込む薄明かりの中、その頬に点々

と血が飛沫しぶいてるのが見えた。よく見れば、私の腕も服も血と泥と煤で汚れている。堪えきれず、私は呟こらいた。

「光神サマーアはどうしてこんな非道をお許しになるの？」

影使いとはいえ、人であることに変わりはない。家族を大切に思い、愛する人を守りたいと思う気持ちに変わりはない。

「こんな非道をお許しになるのなら、私は神など信じない。そんな存在を、私は神とは認め——」

サフラが素早く唇くちびるに人差し指を当てた。

靴音が近づいてくる。

言葉を飲み込み、私は唇を噛みしめた。

扉を開く音がした。光木灯の明かりが差す。乾燥肉を咀嚼そしゃくするくちやくちやという音とともに、浮かれた声が叫ぶ。

「うひょう！ 今夜は飲み放題だぜ！」

「飲む前にきちんと探せよな」

「わかつてるさ」

葉煙草スィガーラの袋が投げ出される音。

「で、そのアルニール伯の娘。すげえ美人だって話、ホントなんだろうな？」
「本当さ。前に見たことあるんだ。殺すにやもったいねえほどの美人だった」

冷やかすような口笛。

「そりゃ、ぜひともしゃ乗れりしとかねえとな」

「冗談、オレが先に決まってるだろうが」

私は手探りでサフラの手を取った。

その掌てのひらに指で文字を書く。

『私を殺せ』

暗がりの中、サフラが息を飲む気配がする。

『私は騎士の娘。奴らに辱められるくらいなら、潔く死を選ぶ』

サフラは私の手を握った。震える指で私の掌に答える。

『貴女のことは私が守る』

私はサフラを見上げた。わずかな光を反射して焦茶色の瞳が輝く。それは暗闇に灯された篝火かがりび。息を飲むほど美しい炎。

サフラの冷たい指先が、私の掌に言葉を綴る。

『貴女は私を助けてくれた。生きる目的を与えてくれた。貴女のためになら、この身が結晶化しても悔いはない』

次の瞬間、鳩尾みぞおちに衝撃を受けた。当て身を受けたのだと理解するよりも早く、目の前が暗くなる。息が出来ない。叫びたくても声が出ない。

「さよなら、ハウファ様」

サフラの気配が遠ざかる。男達の怒号が聞こえる。何かが押し潰されるような音がする。地下室に強風が荒れ狂い、大きな酒樽がぐらぐら揺れる。

薄れていく意識の中、私はそれを理解した。

サフラ……ああ、サフラ――

貴方、影使いだったのね。

気を失っている間に夢を見た。

サフラに出会った時の夢だった。

当時、私は十二歳。大人でもなく、もはや子供でもない。そんな背伸びをしたい年頃だった。私は皆の役に立ちたいと願い出て、アルニールにひとつしかない治療院で病人や怪我人の手当てを手伝っていた。

そこに奴隷の子供が運び込まれてきた。旅の途中で熱病にかかり、捨てられたらしかった。

「厄介なものを拾ったものだ」

高熱に浮かされるその子を、大人達はもてあましているようだった。

「伝染するといけない」

「可哀相だが処分するしかないな」

それを聞いて、私は憤った。いきどおこの子はまだ生きている。必死に生きようとしている。なのにどうしてそんな残酷なことが言えるのだ？

「この子は私が看病します」

私が宣言すると、大人達は驚き、困惑した。

「無茶を言わないで下さい、お嬢様」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。